入選

# うるっさ〜い!!

東京都
小金井市立小金井第一小学校 五年　山口 えり

カチコチ　カチコチ
時計の音が静かにひびく。家にいるのはわたしと母だけ。落ちついて本の世界に入りこめるこの静寂な時間こそが、わたしの宝物。ところがそのとき、
トントントントン
階段をかけ上ってくる足音が聞こえてきた。妹が帰ってきた！
「ただいま〜」
そのとたん、家の中に音が生まれる。スピーカーのスイッチが入った。そんな感じだ。
妹は、家の中をドタバタと走って移動する。決して歩かないのだ。走っているから家中の柱や家具に何度も激突しては、
「いた〜い！」
と悲鳴をあげている。
妹の口はねているとき以外に休むということを知らない。勉強しているときも、本を読んでいるときも、トイレでおしっこをするときでさえ歌ったり、しゃべったり、口笛をふいたりと、妹の口は大忙しだ。「機関銃のようにしゃべる」というのはウソではないのだ。
しかも、その口は、数分おきに、
「おねえちゃん、見て、見て！」
「おねえちゃん、あそぼう！」
「おねえちゃん、これあげる！」
と、わたしに話しかけてくる。さすがに、
「もう、うるっさ〜い!!」
と言ってしまう。わたしだけでなく、家族みんなから言われてしまうのだ。
ところが、今年の夏。妹が全く話さない日が一週間も続いた。妹が高熱を出して眠り続けたのだ。
生まれて七年間、熱を出しても起きて遊んでしまうこまり者だったのに。今回は全くちがった。ごはんもほとんど食べることができず、しゃべるどころかこんこんと眠り続けた。
家が静かすぎて悲しかった。聞こえるのは妹の寝息だけでさびしかった。ごはんを食べるときも、だれも話をしないでただモクモクと食べるだけで、楽しくなかったし、味気がしなかった。
「おねえちゃん、遊んでー。」
と言ってもらえなくて、つらかった。
妹は、音で家族に元気を与えてくれていたのだ。妹が作り出す音が、わたしたちに表情を与えてくれていることに気がついた。妹が話すことに笑い、妹が歌う歌に心がほっとし、「遊んで」のお願いにくすぐったい喜びを感じていたのだ。食事を楽しくおいしく感じさせてくれたのも妹だったのだ。ただ、『うるさい』だけではなかったのだ。はじめて、うるさい妹に感謝したいと思った。
熱が下がった妹は、元気になってまた、朝起きたときから、夜ねるときまで、一日中、音を作りだしている。
妹よ、うるさいぞ!!でも、うるささが、家族に幸せをあたえてくれる。ありがとう!!